

3. 特筆すべき活動 ((1)・(2) でA4用紙1枚)**(1) 全学の教育研究に関する組織改編等への取組と協力、特色ある教育GP等の採択状況と取組、21世紀COE等の採択状況など。**

1. 多元研は、全学教育に対しては8コマ開催、述べ、32名の教員が担当している。また、学部教育については、授業コマ数は少ないが、工学研究科、機械・知能系、化学・バイオ系を中心に担当している。さらに、大学院教育については、協力講座関係にある4研究科と連携し、多くの授業を担当し、教育活動を底支えしている。
2. 国際高等研究教育機構構想については、授業担当教員1名を配置し協力している。
3. 21世紀COEについては、材料科学研究分野 物質創製・材料化国際研究教育拠点（研究リーダー：井上明久教授・金研）には3名、複合化学研究分野 大分子複雑系未踏化学拠点（研究リーダー：山本嘉則教授・理学研究科）には4名、機械研究分野 ナノテクノロジー基盤機械科学フロンティア拠点（研究リーダー：庄子哲雄教授・工学研究科）には1名がそれぞれメンバーとなっている。
4. 医工学研究科構想では1名、グローバルCOE構想では5つのプログラムに協力部局として多元研の名を連ねている。

(2) その他、特筆すべき研究・教育・診療・社会貢献等への取組と成果、世界的位置付け (ISI citation など) など。

1. 「金属学特別コース」（昭和61年創設）で受け入れた留学生の最終学年が平成18年9月で終了するが、これに代わる独自の留学生受入制度として、平成17年度より「多元研スカラーシップ」制度を整備し、実施している。
2. 多元研独自ルートとして、優秀な留学生、他大学の優秀な学生の確保に努めている。
3. 研究企画・交流委員会を設置し、「各種競争的プロジェクト研究情報の収集と所内への発信」を進める一方、所内においては「教授講演会」を実施し、新任教員などの研究の所内教員への紹介などによる異分野間での融合研究の可能性探索を進めている。
4. 民間との包括共同研究も順調に推移し、その中から、平成18年11月に工場建設着手、試運転に移行したプログラムが出た。また、阪大産研との大学間連携事業（新産業創造物質基盤技術研究センター）などを通じて異分野融合研究が進められる体制を整備した。
5. 資源変換・再生やハイブリッドナノ材料の研究センターの他、次年度から先端計測開発センターや窒化物結晶育成総合研究センターを設置する計画である。また、先導結晶化学や有機ナノ結晶科学、圧電セラミックスナノ材料の3寄付研究部門が進行中であり、社会貢献を活発化させている。
6. 特定領域研究、基盤SやAなどから若手研究まで多数の科学研究費補助金を獲得している。また、JST振興調整費研究やNEDOプロジェクトが進行中であり、さらに平成19年度からもさきがけ研究、NEDO支援の「集中研（超ハイブリッド）」をはじめとする複数の大型プロジェクトがスタートする。
7. 準結晶分野で極めて高い引用回数 (ISI citation) を誇る研究者（蔡安邦教授）など、多元研の多くの研究者がそれぞれの分野で基礎と応用の研究活動を活発に展開している。